

「大学政策出前フォーラム in 大東文化大学」参加報告

概要

2020年11月20日（金）～22日（日）、大東文化大学大東文化会館にて、「大学政策出前フォーラム in 大東文化大学」が開催されました。

本来当該プログラムは、通常は「全国大学政策フォーラム in 登別」として9月頃に開催され、全国から学生が登別市に集い、現地に存在する多種多様な課題についての解決策（政策）を提案し、その質を競い合うという形で進められます。2006年に始まり、政策系、福祉系、工学系等の多様な専門領域のゼミが同じフィールドを分析し、それぞれの視点から課題解決のための政策提言を行う大会であり、その老舗の位置づけとなっているものです。しかし、今年度は新型コロナウイルスの蔓延により中止となってしまいました。

一方で、本年度より当該プログラムへの参加は、教育効果が高いことから、履修科目「政治学インターナショナル（政策提言展開・登別）」として単位認定されることになりました。よって中止のままでは、登録した学生の皆さんの履修が成立しなくなる状況になりました。

そこで苦肉の策として考えたのが、登別市に行くのではなく、現地の方々に来て頂き、フォーラムを開催することでした。早速フォーラム実行委員会の皆さんに相談したところ、出前講座という形で開催して頂けることになり、また、登別市役所からもご協力を頂け、本学学生のみを対象とし、感染対策を万全に行い、大東文化会館にて小規模で開催することになりました。11月に入り新型コロナウイルスへの感染者が増え始め開催も危ぶまれましたが、登別から実行委員の皆様と市役所の方々に来て頂け、予定どおり開催し、無事3日間の日程を終えることができました。

このプログラムに参加したのは、4年生3人（高橋祐介君、大栗梨那さん、岡田悠志君）、3年生5人（浜島大輔君、大内優之将君、横山鈴さん、松川功君、上田実李さん）、2年生2人（永澤息吹君、北川莉那さん）と、科目担当の岩橋先生と藤井が参加しました。参加学生は3チーム（東松山（永澤・北川）、藤井ゼミA（高橋・浜島・大内・横山）、藤井ゼミB（大栗・岡田・松川・上田））に分かれ、政策提言に向けて準備を進めていきました。

フォーラムでは、限られた時間の中で調査を行って政策を完成させていくことはもちろん、プレゼン時に使用するパワーポイントまで作成しますので、かなりのハードワークになります。また、提案にあたっては事前の下調べが必要になりますので、参加する学生には相当の負担が強いられることになります。それらを手際よくこなしていかなければならず、自ずとこれらを運営していくマネジメント能力も求められます。よって当該フォーラムには、学生の資質を向上させていくあらゆる要素が凝縮されており、今後社会で必要となるスキルを身に着ける上でも非常に有用な取り組みであると言っても過言ではありません。今年度は現地調査ができないというハンデを背負いながらの政策提言でしたので、参加学生の皆さんにとってはさらに高度なことを求められていたという状況でした。

今年度のフォーラムで与えられたテーマは、「幌別東小学校をリノベーション！！ ―児童と地域住民のさらなる安心を求めて―」でした。通常開催されていればテーマになる予定であった「登別版リノベーション！！～眠る資源をたたき起こして新たな命を吹き込む！！～」をアレンジしたもので、教育をはじめ、健康福祉、産業振興、住民生活などの様々な分野へ新たな命を吹き込むリノベーションをし、児童と地域住民の更なる安心に繋げる提言をするというものでした。このようなテーマについて、地域のニーズを調査した上で、よそ者の視点から登別にとって最適な政策を考えていきました。

今回は現地調査ができないため、その分を政策フォーラムの実行委員の皆さんからのレクチャーに置き換え、情報提供を頂く形で進めました。大東文化大学に来て頂いている実行委員の方々からは対面により、一方、登別市におられる実行委員の方々からはZOOMを利用して、レクチャーを頂く形で進めました。

政策提言は3チームのみでしたので、提言には12分間、それに対する意見交換は20分程度を取り、地元の方々とはじっくりと議論ができる時間を取る形で進める事ができました。今年度は優劣を競い合うという趣旨ではないため、それぞれの発表した政策に対して地域のことを思う地元の方々から熱い意見を頂いたことは、参加学生にとっては大変刺激的であったと思います。

通常なら、2日目の夜は政策提言に向けて深夜まで準備をするところですが、今回は大東文化会館終了の20時までしか作業ができず、その点においてもかなりの制約が生じました。しかし、それぞれのチームは事前学習をしっかりと行い、良い政策案に仕上げたと思います。社会では、どのような状況に置かれても一定の結果を出していくことが求められることがあります。まさに参加学生の皆さんはそれを成し遂げることができ、社会に出ていくためのスキルも積めたのではないかと考えています。

1日目、2日目のプログラム

今回のフォーラムでは現地視察ができないため、実行委員会の方々からレクチャーを頂くことで現地感覚を涵養し地元情報の収集に努めました。登別にいる実行委員に向けて ZOOM で中継を行うとともに、登別からも送信頂くことでプログラムを進めました。プログラムの内容は以下のとおりです。

1 日目 (11 月 20 日 (金))

- ①「リノベーションによるまちづくりの背景&ワークショップ:「Post コロナの暮らしを考える」(担当:松山委員)
- ②「公共施設などの現状と課題&行政の視点からのリノベーションの考え」(担当:登別市菊池行政経営 G 総括主幹)
- ③「NPO の活動状況&連合町内会の取組み&NPO の視点からのリノベーション」(担当:中原委員)
- ④「学生と登別市職員・レクチャー担当者とのヒアリング」(担当:藪中行政経営 G 主査)

2 日目 (11 月 21 日 (土))

- ⑤「よそ者から見た登別」(担当:高橋委員)
- ⑥「東小学校と校区内説明&議員の視点からのリノベーションの考え」(担当:千田委員) **登別から ZOOM で東京会場へ送信**
- ⑦「公共施設等に対する考え&議員の視点からのリノベーションの考え」(担当:天神林委員) **登別から ZOOM で東京会場へ送信**



松山氏よりワークショップの説明を受ける様子



各グループでワークショップに取り組む様子



発表する様子



ZOOM により登別へ送信されます



菊池統轄主管からのレクチャーの様子



中原委員のレクチャーの様子



藪中主査との対談の様子



音声が届かない時にはWEBカメラの前で質問します

政策提言に向けての準備

今回のフォーラムは大東文化会館での開催のため、20時で退館しなければなりません。登別ならば登別グランドホテルに宿泊ですので、納得のいくまで政策を練られるのですが、今回はそうはいきません。参加学生にとっては大きな制約になりました。20時まで会館にて、その後の自宅に帰って政策を練っていました。



本番を想定して練習している様子



細部を詰めている様子

また、本番当日は、全てのチームが朝早く大東文化会館に到着し、本番に向けた最後の練習を念入りに行っていました。



最後の練習の様子



時間を計りながら練習する様子

政策発表の様子

発表の順番は東松山チーム、藤井ゼミAチーム、藤井ゼミBチームの順で行うことになりました。東松山チームは北川さんと永澤君の2人で、Aチームは横山さん、Bチームは松川君が発表を行いました。それぞれの発表原稿を掲載しておきます。

東松山チーム

今回の提言では、幌別東小学校の廃校後に、地域住民がつくる「道の駅」として、誰もが気軽に集まれる場所であること、そして日常的に訪れる生活の一部となることを目指しました。

登別市では都市部への人口流出による過疎化の為に地域でより交流を深めること、小学校の近くを通る国道、高速道路の利用者の休憩場所が必要であると考え、道の駅の設置を提案します。

道の駅がもつ3つの機能、「休憩機能」、「情報提供機能」、「地域連携機能」に触れつつ、設置にあたって、私たちは、「地域連携、道の駅としてあるべき施設、防災、財政」の4つの観点に分けて考えました。

まず初めに、地域連携の面では、地域住民がオーナー意識をもつすなわち、主体となってリノベーションを進めること、皆が交流し、くつろげる場所となることを重点としました。

例えば、花の観賞地があまりない登別市で、学校の敷地内で住民が花などの植栽をすることで景観がよくなるだけでなく、交流が生まれます。また現地の人のニーズにあったデザインを柔軟に設計が可能となり、またコストの削減にも繋がります。一度きりではなく、季節ごとにイベントの開催を見込めます。

このように、花壇を形成することを事業として進めることよりも住民自身が道の駅を築いていくことを重視しています。

そして、住民だけでなくドライバーの休憩所としてのカフェスペースの設置、盛んである酪農を活かした名物などの直売所、市内での飲食の営業を考える方々が店を構えられる場所を取り入れることは、地域のさらなる発展や活性化には必要不可欠です。

飲食店を経営できる場所の貸出に関しては、土地代もしくは賃賃料を抑えることで安く貸出ができ、一方で道の駅の利用客に食事を提供することが可能になります。またカフェスペースは、地域の人や遠くからきた来訪者との接点を築くような場所に繋がります。

地域連携について考えていく中で、人との交流というワードを何度か使ってきました。交流とは、他の人たちとおしゃべりを単にすることであると考えがちですが、ある人には人と関わる場が心の拠り所となったり、またある人には不安を打ち明け共感し合える関係を築いたりできます。よって、住民が主体的に活動できる場を整えることと同様に、キーポイントのひとつであると考えます。

次に、軸である道の駅の設備に関しては、登別市に道の駅がないことより基本的な設備に加え、さらに市の魅力を活かした施設の設置を目指しました。

まず道の駅としての基本的な駐車スペースの確保、これは東小学校の広大なグラウンドを活かし、300台の収容を考えています。加えて休憩機能に関わる24時間利用できるトイレについては、バリアフリーに対応する多目的トイレ、子ども用のトイレなど、様々なニーズ合う設備を取り入れ、またおむつ替え台や自動販売機の設置とより充実的な設備も必要です。

そして3つ目の機能である「情報提供機能」情報の共有として市のイベントやお店をPRができ、交通情報がわかる電子パネルとパンフレットを置けるブースを備えることを計画しています。

先ほど述べたように、今回は道の駅の基礎的な設備だけではなく温泉施設・ドライバーが寝泊まりできる宿泊施設・海の景色が見渡せる屋上テラスの取り付けにより、さらに魅力的に感じてもらうことやここに人が集う場所になることを狙っています。

私たちが思い描く温泉施設は、温泉を掘り起こせなかった場合のリスクを考え、15km程離れている登別温泉からタンクローリーで源泉を運び、施設の運営を行います。また温泉の利用料金を市内客は市外よりも安く設定したり、高齢者等は無料で利用できるようにしたりと、差別化を図ることで登別市に住みたいと思える価格設定を考えています。

次の項目に移ります。道の駅に防災拠点を。2018年、最大震度7の北海道胆振東部地震が発生し、波及した土砂災害などで43人が命を落とし、782人が負傷しました。北海道以外でも、最近では熊本地震・台風19号など自然災害が頻繁に発生しており、日本はきわめて災害が多い国であることを改めて感じております。北海道東部で行われた堆積物の調査により、巨大地震は350年ほどの間隔で発生していることがわかりました。そして千島海溝近辺を震源地とするマグニチュード8.8以上の地震が30、40年以内に発生するともいわれており、道内での防災についての関心はますます高まっていることと思われれます。

こちらが登別市の洪水・土砂災害マップになります。画像中央から左側の胆振幌別川付近では洪水により、浸水が起きることが予想されています。幌別東小学校では洪水・土砂災害の危険は少ないと見られていますが、大きな地震が発生した場合、津波による危険性は高い地域であるといえます。幌別東小学校では地震・土砂災害・洪水からの避難場所、高台避難としての役割を担っていました。地域住民の安全を守るため、「道の駅」へとリノベーションされた後にも「避難場所」としての役割は失ってはならないと考えます。つまり災害時には「避難場所」あるいは「防災拠点」として利用される防災機能が付随した「道の駅」でなくてはならないということです。

防災機能が付随した道の駅ということで国土交通省に認められた岐阜県大野町にありますパレットピアおおのを紹介いたします。平時の際には地元の特産品の直売所、ベーカリー、レストランといったお店が並び普通の道の駅ですが災害発生時には充実した防災機能を備える多機能型道の駅となります。周辺には東海環状自動車道路があるため物資の集積・供給が行いやすい立地であります。また、防災トイレ・貯水槽・防災倉庫といった一時避難所としての設備に加え、ヘリコプターの着陸場があり大規模災害発生時、自衛隊の活動拠点場所として利用することができ、広域的な防災拠点として役割を果たしております。

パレットピアおおのと幌別東小学校には共通点があります。一つは幹線道路の有無によるアクセスのしやすさです。幌別東小学校の周辺には国道・高速道路があり、緊急物資の集積・供給が可能です。二つ目は体育館は耐震化工事が済んでいるため引き続き避難場所として活用でき、屋外には防災倉庫・貯水槽を配置できる十分なスペースがあることです。敷地の広い屋外を自衛隊・災害応援者（ボランティアや医療従事者の方ですね）の方々の活動スペースとして転用すること

もできます。パレットピアと同じく、国土交通省の定める広域的な防災拠点としての道の駅だと認められたばあい、いくらかの補助金が与えられ支出の削減を図ることができます。また地域活性化目的の廃校利用として有利な起債が可能だと思われます。来る大型地震への対策そして住民の皆さんが安心して過ごせる様、道の駅に防災機能を持たせることを提言いたします。

まとめに入らせていただきます。幌別東小学校の廃校後、廃校利用という形で複合型の道の駅をご提案させて頂きました。

住み続けたい、住んでみたいと思われる魅力のある街とは行政だけで作るものではなく地域住民が自ら作り出していくものだと思います。

登別市が今後どのような公共施設をつくるにあたって、さまざまな世代、経歴の方が集まり、互いに知恵を出し合いゆっくりと変わり続ける場所であって欲しいと思います。

以上で発表を終わりますありがとうございます。

藤井ゼミAチーム

これから、藤井ゼミA班の発表を始めます。よろしくお願いいたします。

昨日までの2日間、登別の方々にご講演いただき、「幌別東小学校は統廃合する」といった提案が多くなされていました。確かに、人口減少が進むこの地域では、小学校含め公共施設を削減することは妥当かもしれません。しかし、私たちの班は、あえて幌別東小学校を継続させる方向で提言をさせていただきます。

幌別東小学校を残す最大の理由ですが、それは「小学校が地域の交流の場になっている」という点です。地域食堂「ゆめみーる」・「はまなすメイト活動」・「幌別駒踊り」など、児童だけではなく地域住民を巻き込んだ交流が盛んにおこなわれております。他人に対して無関心な人が増えている世の中で、こういった人と人とのつながりを生む取り組みは貴重であり、守っていくべきです。また、その他の理由として、「統廃合による児童の通学の負担」・「少人数を活かした教育に力を入れている」といった理由もあります。

簡単ではございますが、以上が小学校機能を残す理由となります。

前置きが長くなりましたが、私たちのリノベーション案を発表いたします。私達の政策は「幌別東小学校延命計画」と題しました。

それでは、こちらの図をご覧ください。これが私たちの考えた新たな幌別東小学校のイメージ図です。小学校としての機能だけではなく、研修施設機能を組み込んだ「新たな複合施設」としてリノベーションします(生まれ変わらせます)。図をご覧いただければ一目瞭然ですが、新校舎は小学校機能と研修施設機能を分割しています。理由は生徒・教員の安全の確保であり、地域外の方による研修施設の利用は、原則土・日・祝日・長期休暇のみで考えております。

こちらが新校舎の主な機能と教室のうちわけです。左側には小学校の教室や職員室を想定しております。一方、右側には音楽室や家庭科室といった地域外の方でも使用できる特別教室を入れ、利用できるように形式を想定しております。また、研修施設として必要である会議室・宿泊施設も組み込んでおります。

ここまでを前提としながら、私たちの政策の全体像を説明してまいります。私たちの政策は「まねく」「まなぶ」「ふれあう」の3つの柱で構成されています。

それでは、1つずつ説明してまいります。

1つ目の柱は「まねく」です。

冒頭でも触れましたが、少子高齢化の中、このまま対策を打たなければ幌別地区の人口減少に歯止めをかけることは難しいと思われます。その対策としてこの「まねく」では、地域外の方を幌別地区へ流入させることで人口減少に歯止めをかけることを目指しております。現在、コロナウイルスの流行でインバウンドが減少していますが、一方でコロナウイルスの流行ならでの良い傾向もあります。それは、会社に行かずにパソコン1つで仕事をする「テレワーク」など、新しい働き方が多くの企業で取り入れられるようになりました。そのなかでも、自宅から離れた観光地で休暇を取りながら働く「ワーケーション」は広く知られるようになりました。ワーケーションとは、WORK(働く)とVACATION(休む)の造語で、コロナ禍で混乱する企業、地域、個人それぞれにメリットをもたらす新しい働き方として安倍前政権がコロナウイルスで疲弊した観光地の活性化を目指し観光政策の目玉としたものです。こちらのグラフは2019年にJTB総合研究所がおこなったアンケートの結果です。「外出先での仕事を業務と認められれば休暇が取りやすくなる」と考えている人の割合は(読んで)。コロナ前の段階でこれだけいるということは、コロナウイルスが流行し、会社の制度が整いつつある今であれば、この施設を「ワーケーション」目的で利用する人の需要も見込まれます。また、政府としてもワーケーションについて後押しする方向性を示しているように感じます。例えば/(切る)2020年10月15・16日に観光庁が北海道洞爺湖町でワーケーションについての研修をおこないました。そこでは、観光庁の職員が洞爺湖町でワーケーション体験を行い、地元関係者と意見交換を行いました。また、10月26日におこなわれた菅総理の初の所信表明演説の中で、「ワーケーション」など新しい働き方も後押ししてまいります。】と述べております。こういった背景もあり、ワーケーションをおこなう外部の方に目を向けました。その他のターゲットとしては、中学・高校・大学・社会人のスポーツ、文化団体も考えております。前提のところでも触れましたが、彼らには研修施設側にある宿泊施設に泊まってもらいます。スライドの写真は本学にある宿泊施設です。こういった個室タイプの部屋を導入することを検討しております。

2つ目の柱は「まなぶ」です。

研修施設が併設しているメリットを生かし、登別市の友好都市の学生を小学校に招き入れ、様々な活動を通して、グローバル教育を小学生に対し提供します。学校にお泊まりしながらそれぞれの文化に触れることができるこの施設で小学校同士の交流授業が行えるのではないかと感じました。また、ワーケーション等、ビジネスでの利用者には、小学生に対して講演等を実施していただき、早いうちから自分の将来の仕事について考える、キャリア教育の機会ができます。それだ

けでなく、社会人や学生のスポーツ、文化団体の利用者に技術的な指導等を受ける機会を設ければ、小学生にとって素晴らしい体験になるでしょう。このように、研修施設の併設は、小学生の教育の質の向上にもつなげることができます。

3つ目の柱は、「ふれあう」です。

1日目の中原様の講演で、「ゆめみーる」が幌別地区において重要な役割を担っていることに気づかされました。中原様に直接お話をお伺いしたところ、活動場所は広いに越したことはないとのことでした。そこで、研修施設側に、「ゆめみーる」の新たな拠点を設けます。既存の施設と並行して利用することで、さらに活動の幅が広がり、地域交流の場としての役割をより高めることができるのではないのでしょうか。また、地区内外の特産品を取り扱う店舗を営業する事業者を募集し、販売を行ってまいります。それにより、地元の住民は外部の特産品を、地域外から来た人たちには幌別の特産品を知ってもらい、よりこの地域に対する愛着を深めてもらうことができます。

以上が、私たちが提言する政策の3つの柱になります。

さらに今後日本全体で広がりつつある少子高齢化に幌別地区も飲み込まれると考えます。そこで、児童数が減り、近隣小学校と合併という手段を取らざるを得なくなった場合に備え、小学校・研修施設、全てバリアフリー化し、「老人ホーム」へそのままリノベーションできるように、現在表示されているスライドに記載の機能を予め加えておきます。そうすることで、小学校から老人ホームへリノベーションすることになった際も、比較的スムーズに移行することができます。また、早い段階からユニバーサルデザインを取り入れておくことで、様々な支援が必要な児童に対しても、快適な学校生活を提供することができ、持続可能な公共施設となることができます。

最後にこの政策のまとめを述べさせていただきます。幌別東小学校をワーケーションの場所として幌別を選んでもらえるような、小学校と研修施設がある魅力的な施設にリノベーションします。小学校では児童、保護者が「この学校に通いたい、通わせたい」と思えるような魅力ある教育を提供します。研修施設では「ゆめみーる」の次なる活動場所として、小学校が地域の人たちが集まれるような場所にするので、地域コミュニティを強固なものにして、住み心地の良い地域を目指します。結果的に新しい幌別東小学校があることで移住の候補に挙がるような地域にいたします。つまりこの施設があれば人口減少に歯止めをかけ、地域住民の安心につなげることができるのです。

以上で藤井ゼミ A 班の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

藤井ゼミBチーム

それでは大東文化大学藤井ゼミBチームの発表を始めます。発表内容はこのような流れで進めさせていただきます。

今回のテーマ「幌別東小学校をリノベーション児童と地域住民のさらなる安心を求めて」についてですが今年は新型コロナウイルスの影響もあり現地での調査が行えておりません。そこで私たちは政策を提言するにあたり、登別市が発行している広報誌広報のぼりべつや登別市内で行われたアンケート調査などを参考にしました。その中で高齢者施設や震災対策、観光地としての意識、住環境について興味関心があると答えた方が多いことがわかりました。少子高齢化、人口減少が進む登別市において誰もが安心し暮らせて、さらに観光地としても外部にアピールできるような場所が必要なのではないかと思えます。これらを踏まえ私たちは政策を提言したいと思えます。

その政策とは「登別の拠点を目指せ！幌別東活性化プラン」です。政策の目的は幌別地区の活性化、手段は交流、生活、なりわいの三つの施策を中心に構成されます。この三つの施策により住民の交流拠点、地域産業の発信の場が生まれるという効果が期待できます。そのために小学校を地域活動拠点になる複合型道の駅にリノベーションします。なぜ道の駅なのかというと地域住民の交流拠点と同時にジビエやアイヌ文化といった地域の産業や文化を発信する場所が必要ではないかと思ったからです。室蘭から苫小牧まで休憩できる場所がありません。幌別東小学校は車通りが多い国道 36 号沿いというかなりの好条件下にあり多くの人の利用が見込めると考えたからです。名称は道の駅 ほろ郷です。運営方法は民間事業者には頼らず公営で行います。そのためには財源、人材の確保が課題となります。財源につきましては、補助金、社会資本整備総合交付金、クラウドファンディングなどを活用します。以下のようにこれらを使用し成功した事例もあります。管理費についてですが年間の管理費は資料を参考に年間約 2000 万が想定されます。資料から算出した各種試算では以下のようになり最終的には一人当たりの売上が 1 日 48 円以上であれば年間 2000 万の管理費は確保できます。人材に関しては地域高齢者を活用します。道の駅ができることで高齢者の孤立化の防止、新たなコミュニティが形成されます。高齢者が働く場所を確保することで生きがいも創出されます。それにより福祉機能も備わります。

それでは 3つの施策について詳しく紹介していきます。

施策一つ目は地域のサークル、クラブ活動が盛んな登別で、市民活動センターのぼりんに加えて学校を利用した新たな地域活動の拠点を目指す取組です。交流拠点では以下の案を提案させていただきます。交流拠点の一つ目は空き教室を趣味体験スペースとして利用します。音楽室や図工室といった機材がある程度揃っている教室はそのまま再利用することでコストを抑えることができます。二つ目は中庭をキャンプ場として利用する案です。夏季限定の理由は、冬は寒くキャンプを行う人が少ないのではないかと思ったからです。また、用具を持っていない人でもキャンプができるようにテントの貸し出しも行います。三つ目はアイヌ文化展の実施です。近年白老町にアイヌ施設ができたことによりアイヌ文化の注目度が高まっていると感じています。このイベントを通じた交流でアイヌ文化に興味を持ってもらうことが地域活動の一環として文化を守るための取組にもつながると考えます。

施策二つ目は防災や教育支援などの住民生活に関する取組です。生活拠点では以下の案を提案させていただきますこの提案のきっかけは 2018 年 9 月に北海道胆振東部地震が発生しました。その後のアンケート調査で防災に興味関心や意識を持つ人が多くなったと感じます。そのため防災に関する施設が必要ではないか考えたからです。施策の紹介の前に実際に行われている先行事例をご紹介します。これらの事例から生活拠点の一つ目は多くの人に災害への備えや防災への意識を持ってもらうため防災教室や防災体験イベントの実施です。地元消防士を招いた防災教室やパネルディスカッション

ョン、地元消防士監修の炊き出し体験や段ボールベットの組立、食器や簡易トイレを作成する防災ワークショップを実施します。また、校庭のキャンプ場を利用して避難生活の疑似体験できるテント生活体験や防災キャンプなどを実施します。二つ目は教室の一つを簡易防災展示室として運用することです。防災教室の様子や胆振東部地震の様子を写真で展示します。また、防災のしおりやパンフレット、広報誌、ハザードマップを置いて施設を訪れた人が自由に持ち帰れるようにします。三つ目は小学校体験の実施です。幌別東保育所があるため未就学児向けに小学校の雰囲気を経験してもらったり校内の見学、世代間交流を行います。

施作三つめは道の駅で実施する観光業、ソーシャル・エンタープライズの拠点となる取組です。なりわい拠点では以下の案を提案させていただきます。なりわい拠点の一つ目としてほろマルシェの開催です。ジビエや海産物、乳製品といった地元食材や雑貨販売します。マルシェを通じ地域の飲食店や生産者と協力し地域の魅力を発信します。それが観光客の集客、地域産業の振興につながると考えます。二つ目は学校給食風のメニューやジビエなどの地元食材を生かしたメニューを提供する幌別東お食事処、H2O の出店です。地域産業の振興にあたり北海道独自の食文化に着目しました。ジビエなどの地域食材を生かしたメニューの提供や給食で使用している食器を使うことで小学校感を演出します。食材調達はゆめミールのようにフードバンクから調達したり漁港と連携し仕入れられます。それがフードロスの削減につながり SDGs にも寄与します。これらの取組は高齢者の雇用創出、新たなコミュニティを作ったり、高齢者の生きがい、やりがいになります。高齢者が働くという新たな形が住民福祉の向上につながります。

それでは政策のまとめに入らせていただきます。一つ目の交流では地域のサークル活動、住民同士の交流が地域のつながりを強化し、地域住民の新たな活動拠点としての役割を果たします。二つ目の生活では、施設の防災イベントの実施により災害時の備えや地域の防災の在り方について考えてもらうきっかけになります。それが防災意識の向上につながり地域の安心、安全につながります。また、小学校体験など施設での活動を通じた世代を超えた交流は住民のさらなる安心に寄与します。三つ目のなりわいでは地元資源を活用することが住民福祉の向上拠点になります。ゆめみーるのようなソーシャルエンタープライズ方式により元気な高齢者の増加につながります。

このように私たちは交流、生活、なりわいの三つの拠点のつながりを重視しています。体験講座やイベントを通じ交流と生活がつながることで世代間交流が生まれ、マルシェや H2O が生活となりわいをつなげることで交流人口の増加が期待できます。ほろ郷での活動を通じ、交流となりわいがつながることで出会いのサイクルが生まれます。このように各拠点がつながることで新たな価値、相乗効果が生まれます。こうした道の駅と地域の交流拠点が道の駅 ほろ郷のように一体となることは観光地として機能だけではなく地域住民の安全にも寄与します。そしてこれまで説明してきた効果が幌別地区の活性化につながります。

おわりに

今回は「幌別東小学校をリノベーション児童と地域住民のさらなる安心を求めて」をテーマに私たちの政策を提案させていただきました。幌別東小学校は道路沿いに面しており道の駅として活用することで街の新たな観光スポットのなると考えています。さらに地域にこのような拠点があることは地域の交流を通じた強固なつながりを生みます。そしてこのつながりにより地域住民が安心して生活できるコミュニティが構築できると考えています。これで大東文化大学藤井ゼミB チームの発表を終わります。最後までご清聴いただきありがとうございました。



発表のルールを説明する松山委員



東松山チーム（発表者：北川さん、永澤君）



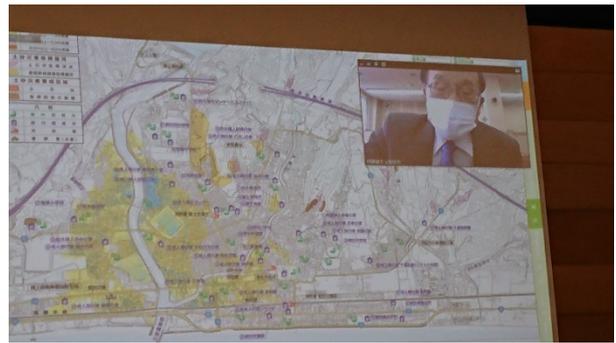
Aチーム（発表者：横山さん）



Bチーム（発表者：松川君）



発表の内容は ZOOM で登別に配信されます。



登別から質問が来ます。

本来なら会場に 100 名近い他大学生、審査員、地域関係者がいて、多くの人の前で発表する経験を積めるチャンスなのですが、今回は ZOOM を利用しましたので、パソコンの前で発表する形となりました。この点はどうしようもないものでした。

3 チームとも限られた時間の中で精一杯頑張ったと思います。その中でも、東松山チームは全くの初心者の 2 年生であるにも関わらず、しっかりとした発表内容で、北川さんと永澤君の資質の高さが光るものとなりました。この経験を活かして、是非とも来年は現地にて政策提言にチャレンジして頂きたいです。

おわりに

今回のフォーラムでは、コロナ禍の中、ZOOM を利用して登別と板橋をつないで行いました。途中、音声が届かなかったこともあり、もっとうまくいく方法があったのかもしれません、できることで最低限のことはできたのかと思いますし、今後の運営のあり方へのトライアルになったのではないかと思います。

今年から登別フォーラムへの参加は、「政治学インターンシップ（政策提言展開・登別）」という科目になり、他学部からも受講できることになりました。2 年生の北川さんは文学部、3 年生の上田さんは経営学部所属しており、次年度もこのような他学部の学生さんが受講してくれることを期待しています。

また、段々とフォーラム経験者が増えてきて、後輩を指導するような流れもできてきています。このような流れを大切に、教える方、教えられる方の双方が、このフォーラムにより成長していく流れができれば、さらなる展開につながっていくものと思います。今後の発展が楽しみです。



参加学生の声

永澤息吹 君(政治学科2年生)

今回初めて大学政策出前フォーラムに参加しました。率直な感想として、悔しさの残る発表となってしまいました。私のグループではリノベーション案として「複合的な道の駅」を提言いたしました。提言にあたり、登別市の方々から様々な話を聞くことで十分な準備したつもりでした。しかしその後の質疑応答・先輩方の発表を聞き、いかに準備不足であったかを知ることとなりました。登別市の方から質問された「現実的に可能なのか」「どうすれば可能になるのか」という根本的な質問に答えることができず、また先輩方のように市の現状をよく理解しておりませんでした。岩橋教授から「二年生で初参加にしては良くできていた」と、言葉がけを頂きました。しかし自分の納得するパフォーマンスができなかった今回の発表は、大変悔しい経験となりました。

今回の悔しさを晴らすためにも次回のフォーラムに参加したいと思います。次回では現状に即したより現実的な提言ができるよう、日頃から多角的な思考を意識していこうと思います。

北川莉那 さん(文学部英米文学科2年生)

政策フォーラムは今回、初めての参加であり、また私は文学部に在籍している為、政治学についての知識がほぼない状態でした。正直に言うと、初めは登別市の方々を含め皆さんの前で発表を行える自信はなく、不安しかなかったです。しかしその気持ちは事前準備を進めるうえで、少しずつ変わっていきました。

まず3日間の大東文化会館での事前準備の前では、地域活性化の事業、廃校の活用事例や登別市について等、グループのメンバーが各々調べ、オンラインで発表をする形をとっていました。普段生活する中では、あまり触れることのない内容であったので、新たな考えを知る機会となりました。

今回のテーマである幌別東小学校のリノベーションに関する取り組みでは、この調べ学習を活かし、このリノベーションで何が求められているのかを考え、意見を言い合いました。私たちのグループは私を含めたたった二人しか居なかったため、様々な案を考えることにとても苦労しました。さらに、出し合った案を11、12分間の発表にまとめ上げなくてはならないので、何度も私たちの提言内容を確認し、何についてどれ程の説明が求められるのか悩まされました。本番の発表までに、夜通しより完璧にしようと発表資料と原稿を作り、発表練習に励みました。

実際に発表を行い、様々な気づきがありました。当日は原稿を落ち着いて読み上げ、少し戸惑いもありつつもなんとか質問にも答えることが出来ました。少ない人数の中、ここまでよく仕上げられたなとも思いました。しかし、周りの緻密であり簡潔にまとまった発表と見比べると、もう少し煮詰めることが出来た部分があったのではないかと思います。この悔しさを忘れずに次回のフォーラムでより納得のいく発表をしたいです。

私はそもそも将来、旅行業に関わる仕事に就きたい、そのために様々な地域について知りたいと考えていた中、政策フォーラムのお知らせを目にしました。政治学科の開講科目だけあって、参加していた方々は政治学科である学生が多かったのですが、実際に生の声や発表に対しての意見を聞くことが出来る掛け替えの

ないとても良い経験であったと思います。

政策フォーラムを開催して下さった先生方や参加して下さった登別市の方々、素晴らしいプレゼンテーションを行って下さった先輩の方々、そして一緒に案を練り上げ発表をした永澤君には感謝の思いでいっぱいです。この経験を活かし更なる学びへと繋げていきたいです。

松川巧 君（政治学科3年生）

今回初めて登別政策フォーラムに参加しました。政策を一から作り上げるというのは初めての経験でした。今回は登別市での開催ではなく学校での開催だったため現地調査が行えず政策を作っていく中で登別の実情に合っているのかなどの不安もありました。実際に発表の直前に内容の変更を行ったりしたのでかなり大変でした。それでも他のメンバーと協力して政策を作り上げ、発表したときはかなりの達成感がありました。

また、自分は発表と原稿づくりの担当でした。自分の考えを文字に起こしたり発表時間に合わせた原稿を作るため何度も書き直す作業はとても苦労しました。発表においても相手に伝わるように発表を行うというのは大変なことでした。

最後に、今回のフォーラムをサポートしてくださった藤井先生、チームを引っ張ってくださった岡田先輩、大乗先輩、上田さんにはとても感謝しています。このフォーラムを通じてとても良い経験ができました。ありがとうございました。

大内優之将 君(政治学科3年生)

政策フォーラムへの参加は今回が初めてでした。政策フォーラムでは、主体的にその地域を研究・分析し、どうすれば課題解決に繋がるかを考え、自分たちで考えたことを相手方にわかりやすく伝える難しさを経験することができました。

私は、発表のスライド作成を担当していましたが、日頃、PowerPointに深く触れてきていなかったこともあって、スライド作成には苦戦しました。受け手がわかりやすいようにスライドを作成することを心がけましたが、自分が納得できる最高のスライドを作りあげることができず心残りです。今後、PowerPointに触れる機会を自主的に増やし、スライド作成に慣れていきたいと思っています。

新型コロナウイルスの影響により、実際に現地に足を運ぶことができない状況下で、現地を自分の目で見るができないゆえの難しさもあり、不安感もありましたが、チームで話し合いを重ね、自分たちの提言を一つにまとめ上げることができました。結果、私たちのチームは一番良い評価を頂きました。チームの皆様にはとても感謝しています。

この政策フォーラムでは、授業のように教えてもらうだけではなく、自分たちで考え、能動的に動くことで、「考える力」、「チームワーク」、「自分の考えをわかりやすく発信する力」などの必要性和大切さを改めて実感できる貴重な学びの場でした。ここで学んだことや経験を活かし、今後も精進します。

上田実李 さん(経営学部3年生)

私は、今回初めて登別政策フォーラムに参加させていただきました。途中参加の上に、政治学科生ではないため知識的な面で不安でした。しかし、先輩方が発言しやすいチーム環境を作ってくくださったおかげで、その不安はなくなりました。

今回のフォーラムを通して、「議論する力」「協調性」「立案力」を学びました。議論をするためには、個人の知識が必要な上に、創造性が求められると感じました。また、自分の意見を述べるだけでは足りず、仲間の意見も聞き入れ、すり合わせる必要があります。さらに、政策を提言するには創造性だけでなく現実性も求められ、財政面との兼ね合いを考慮することに苦労しました。

今回、学部学科の壁を越えた学習ができ、とても良い経験になりました。この経験を残りの学生生活や社会人になった時に活かしていきます。

最後に、他学部生でありながら迎え入れてくださった先生方、ゼミ生のみなさん、本当にありがとうございました。

横山鈴 さん(政治学科3年生)

今回大学内のみではありましたが、政策提言という貴重な体験をさせていただきました。最初は、行ったこともない地域の政策をテーマのみで考えるのは非常に難しくなかなかイメージが湧かなかったのですが、チームの人たちと意見を出し合い、議論を重ねていくにつれ少しずつ政策が出来上がっていきとても楽しかったです。

また当日は事前に地域についてインターネットで調べ、政策を用意はしていましたが、実際に登別市の方々の話を聞いて、インターネット上の情報だけでその地域のことを判断するのは無理だと実感しました。幸いなことに今回1番いい賞をいただくことができましたが、完璧に地域に合っているとは言い難いものだったので地域を自分の目で見て政策を考えなかったのが心残りでした。ですので来年も可能であれば参加したいと思います。

藤井先生、岩橋先生、そして登別市役所の方々、実行委員会の皆さんこのような状況下開催していただき

本当にありがとうございました。今回の経験を今後の就職活動、論文執筆に役立てていきたいと思ひます。

浜島大輔 君(政治学科3年生)

今年度はコロナウイルスの影響で現地に行くことはできませんでしたが、昨年度の登別政策フォーラムに参加し、実際に現地を見たことがあるという経験を少なからず発表に活かすことができたかなと思ひています。例年の政策フォーラムでは、現地に着次第ずと現地調査の時間になっている為、今回のように現地の市町村の方や議員様のお話を聞くことができ、例年とはまた違った貴重な体験をさせていただいたと感じております。

今回のもの以外にも、いくつかの政治学インターンシップに参加しているものとして、来年度も開催できるかは分かりませんが、こういった各種インターンシップが続いていくことを切に願ひます。

最後になりますが、藤井先生、岩橋先生をはじめとする多くの関係者の皆様に御礼申し上げます。

口栗梨那 さん(政治学科4年生)

私は政策フォーラムに参加するのは今回で2回口でした。前回参加した京口辺フォーラムでは良い結果を残すことができなかつたため、今回の登別フォーラムではそこでの反省を活かし、運営主体や財源などに触れて提案したいと思ひていました。

今回は新型コロナウイルス感染拡口のため、現地調査も現地開催もできないということで、現地のことを知るのにとて苦勞しました。しかし、以前登別フォーラムに参加した岡口君や藤井先口から、現地の様口を教えていただき、そこからイメージしたり、インターネットで調べたりして、なんとか政策を作り上げることができました。

フォーラムの1、2口口の後には、政策の修正を何時間も口い、焦りと疲れが募りましたが、なんとか3口口の発表を無事に終えることができ良かつたです。講評で、B チームは現実的な提案だつたと口っていただけたことが、私個口としては嬉しかつたです。

岡口君にはチーム全体を引っ張ってもらい、松川君には発表と原稿作成を頑張ってもらい、上口さんは、施設の名称などを多く考えてくれました。誰か口口でも口けていたら発表まで辿り着けなかつたと思ひます。本当にB チームの皆さんには感謝しかありません。

最後に、この政策フォーラムを口学で開催するためにご尽口いただき、様々なアドバイスをくださった藤井先口、参加してくださった登別市の委員の皆様、市役所の皆様に感謝申し上げます。この経験を就職後にも活かしていきたいと思ひます。

岡田悠志 君(政治学科4年生)

私口口、政策フォーラムに参加させていただいたのはこれで3回口(2018年登別、2019年京口辺、2020年今回)ですが、何度やってみても政策提案というのは難しい作業であると改めて感じました。特に今回は出前フォーラムということで現地でのヒアリングが口えず、登別市に口つたことのないチームのメンバーはかなり想像口を働かせ、ともに政策の作成から発表までを口つてくれたと思ひます。ただ、今回は前回と違い、現地の口の登別市に関するレクチャーの時間が多くあり、その時間で私たちの思索していることが本当に必要なことであるのかを吟味できました。そのおかげもあり、現地に口けないなりに登別市の実情に沿った提案をできたのではないかとと思ひております。2、3年口はこの経験を次に口かし、さらに勉強を深めて欲しいと思ひます。

最後になりますが、今回の出前フォーラムを計画、実口してくださった藤井先口、岩橋先口を始め、登別市からわざわざお越しくくださった政策フォーラム実口委員の皆様、ならびにオンラインで繋いでくださった登別市職員の口々、市議会議員の口々に口変有意義な学びの機会を提供していただいたことのお礼を述べさせていただきます。ありがとうございました。

高橋祐介 君(政治学科4年生)

今回のフォーラムには、「全国大学まちづくり政策フォーラム in 京田辺」の経験者として、後輩たちへの助言役という立場で参加させていただきました。

実際に現地へ出向いて調査活動ができないという制約は大きく、政策を形にするのは、かなり難しかつたように思ひます。しかし後輩たちは、インターネット上で閲覧できる新聞報道や統計資料等を参考にしながら、頑張つて政策を考えてくれました。特に、発表前日の打ち合わせで、後輩たち同士が熱く議論している姿は、自分にとてても良い刺激になりました。

自分は政策提言発表の場に立ち会うことができずでしたが、結果は3チームの中で1番良い賞を受賞できたとのことで、これまでの努力が報われる形になったのではないのでしょうか。リーダーとしてチームを引っ張ってくれた浜島君、プレゼンターを務めてくれた横山さん、PowerPointで発表スライドを作成してくれた大内君、3人とも非常に優秀で、今後が楽しみな後輩たちです。藤井ゼミの4年生として、このような後輩たちがいることを嬉しく思ひます。ぜひ来年も、積極的に政策フォーラムに参加してほしいです。

最後に、開催にあたりご尽力いただきました関係者の皆様に、この場をお借りして御礼を申し上げます。ありがとうございました。